

☆年間第6主日(2月12日)の聖書朗読☆ ※主任司祭からの解説があります。

**第一朗読 (シラ書 15章 15-20節)**

その意志さえあれば、お前は掟を守り、  
しかも快く忠実にそれを行うことができる。  
主は、お前の前に火と水を置かれた。  
手を差し伸べて、欲しい方を取ればよい。  
人間の前には、生と死が置かれている。  
望んで選んだ道が、彼に与えられる。  
主の知恵は豊かであり、  
主の力は強く、すべてを見通される。  
主は、御自分を畏れる人たちに目を注がれる。  
人間の行いはすべて主に知られている。  
主は、不信仰であれとは、だれにも命じたことはなく、  
罪を犯すことを、許されたこともなかった。

**第二朗読 (使徒パウロのコリントの教会への手紙 I 1章 6-10節)**

皆さん、わたしたちは、信仰に成熟した人たちの間では知恵を語ります。  
それはこの世の知恵ではなく、また、この世の滅びゆく支配者たちの知恵でも  
ありません。わたしたちが語るのは、隠されていた、神秘としての神の知恵で  
あり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておら  
れたものです。この世の支配者たちはだれ一人、この知恵を理解しませんでした。  
もし理解していたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。  
しかし、このことは、「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かび  
もしなかったことを、神は御自分を愛する者たちに準備された」と書いてある  
とおりです。わたしたちには、神が“霊”によってそのことを明らかに示してく  
ださいました。“霊”は一切のことを、神の深みさえも究めます。

## 福音朗読（マタイによる福音書 5章 17-37節）

そのとき、イエスは弟子たちに言われた。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。はっきり言うておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。だから、これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、そうするよう教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる。」

「言うておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていないければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。」あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。

兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。だから、あなたが祭壇に供え物を献げようとし、兄弟が自分に反感を持っているのをそこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に置き、まず行って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい。あなたを訴える人と一緒に道を行く場合、途中で早く和解しなさい。さもないと、その人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれるにちがいない。はっきり言うておく。最後の一クアドランスを返すまで、決してそこから出ることはできない。

あなたがたも聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。もし、右の目があなたをつまらずかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に投げ込まれない方がましである。もし、右の手があなたをつまらずかせるなら、切り取って捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に落ちない方がましである。』『妻を離縁する者は、離縁状を渡せ』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。不法な結婚でもないのに妻を離縁する者は

だれでも、その女に姦通の罪を犯させることになる。離縁された女を妻にする者も、姦通の罪を犯すことになる。

また、あなたがたも聞いているとおり、昔の人は、『偽りの誓いを立てるな。主に対して誓ったことは、必ず果たせ』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。一切誓いを立ててはならない。天にかけて誓ってはならない。そこは神の玉座である。地にかけて誓ってはならない。そこは神の足台である。エルサレムにかけて誓ってはならない。そこは大王の都である。また、あなたの頭にかけて誓ってはならない。髪の毛一本すら、あなたは白くも黒くもできないからである。あなたがたは、『然り、然り』『否、否』と言いなさい。それ以上のことは、悪い者から出るのある。」

### 朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

南岸低気圧もさほど雪を降らせず去っていきました。今日は素晴らしい天気になっています。11日はルルドの聖母の記念日で、世界病者の日でした。ここ数年コロナの感染症があつて感染症の怖さや健康であることの大事さを痛感していますが、まだ病気で苦しんでおられる方々がたくさんいらっしゃいます。その方々へ神様の慈しみが注がれますように祈りましょう。また、数日前にトルコやシリアで大きな地震が発生し、二万人とも言われる死者が出ています。ご遺族の方々の悲しみが少しでも癒されますよう祈りましょう。さて、今日のミサでの神さまの言葉をかみしめてみましょう。

### 第一朗読（シラ書 15章 15-20節）

シラ書では神のみ旨に従うことの大切さが述べられています。「その意志さえあれば・・・」と。罪を犯すのはそれを選んだ人間である。「望んだ道が彼に与えられる」と。私たち人間は絶えず選びを行っているのです。この選びが主に受け入れられるように、私たちの行いを正しく選ぶことができる神の知恵が与えられるように祈りましょう。

## 第二朗読（使徒パウロのコリントの教会への手紙Ⅰ 1章 6-10節）

パウロはここで隠されていた神の知恵を語ります。この知恵はこの世の滅びゆく支配者たちの知恵ではないとパウロは述べています。隠されていた神秘としての知恵であり、それは十字架に付けられた主イエス・キリストだと言っています。つまり、私たちをこの世の悪から救うのはイエスの十字架の苦しみのことです。そのほかの手段、知恵はありません。これらのことは世に隠されていたのです。私たちには神が霊によってそのことを明らかにしてくださったのです。世の人々にとっては躓きの十字架、しかし神を愛する人にとっては救いの十字架なのです。

## 福音朗読（マタイによる福音書 5章 17-37節）

イエスは自分が来たのは律法を廃止するためではなく、完成するためだと言われます。イエスはその宣教活動の中でたびたび律法学者やファリサイ派の人々の律法に関する認識を指摘されています。しかしこれは律法を断罪するためではなく、律法の解釈によって律法本来の意図を曲げてしまっている人々を断罪されておられるのです。律法は元来救いに至る道を指し示すものであり救い主の到来を準備するはずのものなのですが、当時の律法主義者たちは、この救い主の到来を認めなかった、または救い主を排斥したのでした。律法の本質である「神を愛し、自分のように他人を愛しなさい」というものの実行をイエスは迫ったのです。律法の字句に捉われないその中にある神の望みを行うこと、これは律法の破壊ではなく完成なのだといイエスと言われるのです。私たちも自分の凝り固まった考え方にとらわれずに、神の望みを行い、神の望みがどこにあるかを探し求め、実行することができるように努めましょう。



長野県聖高原の冬景色。(2016)

**P.S.**

二月も半ばを迎えて随分春めいてまいりました。まだ寒さが残っていますがこれからは一雨ごとに温かくなります。

新しいミサの式次第については私たちは少しずつ慣れてきたように思います。また、2月22日(水)は灰の水曜日になります。この日のミサは19:00からです。去年の枝の主日に使った棕櫚の枝がある方は19日(日)までに教会までお持ちください。

寒さがまだ残ります。お体大切になさってください。

カトリック足立教会  
主任司祭 野口重光